

葛飾区郷土と天文の博物館 展示紹介 「花の宴 堀切の夢」

葛飾区郷土と天文の博物館 博物館専門調査員 富澤 達三

はじめに

平成七年三月に開催した特別展「堀切菖蒲園 葛西花暦」から一三年。今回の企画展（平成二〇年一月二〇日～二二年二月一五日）では、堀切の花菖蒲と梅など初春に咲く花々を描いた錦絵（浮世絵版画）を中心に、絵図・絵葉書、かつて花菖蒲園を経営していた旧家の資料を展示しました。

季節の草花の鮮やかな色を描くことは、多色摺り版画である錦絵が得意とすることでした。本稿では、花菖蒲や初春の草花を描いた人気浮世絵師を何人か挙げ、錦絵の黄金時代と、明治期に錦絵が新時代のメディア絵葉書に圧倒された歴史を述べます。そして錦絵や絵図・絵葉書などの画像資料が、地域の歴史を物語る歴史資料として注目されている現状について述べたいと思います。

一 錦絵に描かれた菖蒲園

現在、江戸時代の庶民芸術として海外でも高く評価されている錦絵（浮世絵版画）は、東錦絵（あづまにしきえ）と呼ばれた江戸の名産品

でした。その製作・販売は地本問屋（おほんどんや）と呼ばれる娯楽的な出版物の版元が行いました。まず

版元は浮世絵師に版下絵を依頼します。絵柄は事前の検閲を通す義務がありました。政治批判や、世間の大事件を描くことは禁じられていたのです。検閲を通った版下絵には検閲印が押され、これを元に、彫師が使用する色版の数だけ版木を彫刻します。そして最後に摺師が重ね摺りして錦絵が完成します。このような版元の企画と浮世絵師・彫師・摺師の高度な分業体制によって、江戸では膨大な錦絵が生産されたのです。錦絵には様々な判型がありますが、最も一般的なものは大判サイズ（約三九×二六・五cm）で、これを二枚続・三枚続とワイド画面にした作品もありました。

錦絵は、巷の流行を描くニュース媒体としての役目も大きく、広大な田園の中に咲き誇る堀切の花菖蒲を楽しむ人々の姿が錦絵で描かれ有名になると、さらに多くの人々が堀切を訪れたのです。今回の展示で作品を紹介した主な浮世絵師は、以下の

通りです。

五人の広重

江戸時代末期の浮世絵師・初代歌川広重は欧米でも大人気ですが、その名跡が五代続いたことは知られていません。五人の広重と作品について簡単に紹介します。

・初代（寛政九～安政五年）一七九七～一八五八

初代歌川広重は、江戸幕府の定火消同心・安藤家に生まれた武士でした。一五歳のとき歌川豊広に入門、二七歳の時には養子に家を継がせて、画業に専念します。天保年間（一八三〇～四四）風景画に開眼し、天保四年（一八三三）に『東海道五拾三次之内』のシリーズが当たり、次々と各地の名所絵の続き物を発表する人気浮世絵師となります。晩年には百点を超える『名所江戸百景』のシリーズに挑戦します。その中の一枚「堀切の花菖蒲」では、花菖蒲を手前に大きく描き、後方には遠く広がった菖蒲田を描く、大胆な手法が見られます（図1）。

・二代（文政九～明治二年）一八二六～六九

本名は鈴木鎮平。初代同様、江戸幕府の定火消同心の家柄でした。初代死後の安政六年（一八五九）、その養女・お辰の入婿となり二代広重を襲名、名所絵や花鳥画を描きました。お辰より二〇歳も年上であったため不仲で、慶応元年に離婚し二代広重の名を返上します。家を出た後は喜齋立祥（きさいりつしょう）を名乗り作画を続け、横浜から輸出される日本茶の箱用のラベル絵を手がけたことから「茶箱広重」とも呼ばれました。季節の花卉を上品に描いた『東京名所三十六花撰』シリーズは代表作で、堀切の花菖蒲を鮮やかな紫色で表現しています（図2）。

・三代（天保一三～明治二七年）一八四二～九四



（図1、名所江戸百景 堀切の花菖蒲）



(図2、東京名所 三十六花撰 二十 東京堀切花菖蒲)

本名・後藤寅吉。深川の船大工の家に生まれ、料亭の養子となりますが、絵に没頭して仕事をしないため主人も諦め、初代広重に弟子入り。初代の死後は二代に学びます。二代

が初代の養女・お辰と離婚したのち、入婿となります。明治初期から東京名所・横浜絵・鉄道絵など、文明開化で変わりゆく風景・風俗を描きました。洋紅を効果的に使って堀切の菖蒲園を描いています(図3)。

・四代(嘉永元〜大正一四年) 一八四八〜一九一五

本名・菊池貴一郎。医師の家に生まれますが、芝増上寺の御庭番・菊池家の養子となります。晝画を好み、二代広重に絵を学んだ可能性も指摘されています。縁あって、途絶えていた広重の名跡を次いで欲しいと頼まれ、四代広重を襲名。のち日本橋本白銀町で寺子屋を開き、書道や漢文を教えて生計を立てながら、江戸時代考証家として活躍します。

・五代(明治二三〜昭和四二) 一八



(図3、東京花名所 ほり切の里花菖蒲)

九〇〜一九六七

本名・菊池寅三。菊池貴一郎の次男で、父の書道塾を継ぎ、五代広重を襲名します。団扇絵・掛軸・色紙などの作品を残しました。東京大空襲で日本橋本石町の自宅を失い転々となりますが、戦後は東京都葛飾区亀有に引っ越しています。

文明開化の浮世絵師たち

明治時代になっても錦絵の人気は衰えず、絵師たちは美人画や役者絵・名所絵などを描きます。外国から安価な洋紅が輸入され、鮮やかな赤色が表現できるようになり、彫り・摺りの技術も一層進化し、多くの作品が生み出されました。堀切の菖蒲園も多くの浮世絵師に描かれて

います。

・大蘇芳年(天保一〇〜明治二五) 一八三九〜一九一〇

幕末維新の動乱期に凄惨な残酷絵を描き、「血みどろ絵師」といわれることもある芳年は、明治初期に精神を病みますが回復し「大蘇」の号を用いて武者絵や美人絵、文明開化の新メディアである新聞の記事を取り入れた『錦絵新聞』を描いて人気を得ました。のち歴史画にも腕を振るい数々の秀作を残します。花菖蒲ものでは、洋服姿で洋傘を持った芸妓の美人絵を描いています(図4)。



(図4、風俗参十二相 遊歩がしたそう)

・楊洲周延(天保九〜大正元二) 一八三九〜一九一〇

周延(ちかのぶ)は、歌川国芳・三代豊国に学んだのち豊原国周に弟子入りし、門下の第一人者となります。実家が代々幕府の御家人であった経験を活かし、江戸時代には描く

ことが禁じられていた江戸城大奥の様子・幕府の行事や風俗を描いた作品を三枚続・五枚続のワイド画面で描き、好評を博しました。後に西南の役や日清戦争の際には三枚続きの戦争画を多数描いています。弟子の延一(のぶかず)は師の画風を受け継ぎ、美人画・戦争画などに腕を振るいました。八ッ橋から花菖蒲を見物する日傘を持った美人を優雅に描いています(図5)。



(図5、美人堀切の遊覧)

・尾形月耕（安政六〜大正九）一八五九（一九二〇）

月耕は江戸の京橋に生まれ独学で絵を学び、明治の初め輸出用の陶磁器・漆器の絵付けで高い評価を得ます。さらに『絵入朝野新聞』の挿絵画家となり、明治一八年（一八八三）から、春陽堂の出版物の表紙絵や挿絵を手がけて活躍しました。

月耕の錦絵作画の最盛期は明治二



（図6、花美人名所合 堀切の菖蒲）

〇（三〇年代で、明治二八年からの三枚続『花美人名所合』のシリーズでは、堀切の菖蒲園も描かれ、洋傘を持った江戸時代風の美人を描いています（図6）。

・小林清親（弘化四〜大正四）一八四七（一九一五）

幕府の御家人の家に生まれた清親は、少年期から絵を好みました。幕府側の武士として鳥羽・伏見の戦いや江戸開城、十五代将軍徳川慶喜の静岡移住などの苦難を体験します。明治七年（一八七四）東京に戻り、絵師を志しました。修行のため、画家で写真師の下岡蓮杖に写真術を、



（図7、堀切花菖蒲）

英国人ワグマンから油絵を習うなどして、浮世絵の伝統に縛られない独自の画風を確立、明治九年ころから光と影の陰影をはっきりと描く「光線画」のシリーズで人気を得ました。遠景から堀切菖蒲園をのんびりと描いた作品が残っています（図7）。

二 松平定信の浴恩園

江戸時代には、俗に大小三百もの大名がいたといわれます。大名たちは幕府から上屋敷・中屋敷・下屋敷を拝領し、規模に応じて、自らくつろぐためや客をもてなすために庭園を造りました。江戸時代の有名な政治改革「寛政の改革」を断行した、奥州白川藩主で幕府の老中をも勤めた松平定信も、築地（現、東京都中央区）付近の江戸湾に面した下屋敷に、約五・七ヘクタールの広大な庭「浴恩園」を造ります。浴恩園は江戸湾から二つの池に海水を引き入れた回遊式庭園でした。文人としても活躍した定信は、老中退任後の寛政六年（一七九四）ころに浴恩

園を完成させます。庭内には多くの植物を植えて小山を作り盆栽や奇岩を置いて鶴を放ちました。そして自ら五一の名勝を設けて、風流三昧の隠居生活を送ったのです。



（図8、浴恩園 御在時之図 [国立国会図書館蔵] ）

定信は園内に桜・梅・蓮など様々な花を植え、その中には花菖蒲もありました。現在は写本を含め数点の浴恩園図が国立国会図書館・天理大学図書館・海上保安庁海洋情報部などに残されています。いずれの浴恩園図でも、咲き誇る四季の花々が、豪華絢爛に描かれています(図8)。

のちに浴恩園は幕末の大火で失われ、明治時代になると海軍用地となつて完全に失われますが、現在残っている浴恩園図は、かつての美しさを偲ばせる貴重な画像資料です。

三 錦絵から絵葉書へ

明治時代になると、新しい情報媒体が、徐々に庶民に浸透していきます。とくに写真は、その名の通り目の前の出来事や人物を写し撮る新しい技術でした。明治初期、写真は大変に高価で、政府の高官や外国人など一部の限られた人々だけのものでしたが、写真風のリアルな画像は、

石版画によって再現されます。明治一〇〜二〇年代にかけて写真画像を真似て、美人や名所・災害などを描いた石版画が盛んに作られました(図9)。のち石版画は多色刷りとなり、その技術は大型ポスターの印刷などに使われました。

絵葉書の時代

写真画像を金属に製版し、紙に大量に印刷する技術が生み出されたのは、明治二〇年代のことです。明治三〇年代には、写真画像を使った絵葉書を大量生産することが可能になります。すでに日本でも外国に倣い郵便制度が整備され、明治六年(一八七三)年には官製絵葉書が発売されていましたが、私製はがきの発行が通信省(いまの郵政省)から許可されたのは、明治三十年一〇月一日のことです。許可のわずか四日後には、少年向け雑誌の付録に絵葉書が付いたといわれます。

明治三十七年の日露戦争勝利ののち通信省が戦勝記念の写真絵葉書を発売すると、熱狂的な絵葉書ブームが起こります。特に明治三十九年の凱旋記念絵葉書発売の際には、各郵便局に人が押しかけ、東京江戸橋の郵便局では死者が出るほどの騒ぎとなりました。こうして庶民の間に定着し



(図10、堀切花菖蒲 堀切園)

た写真絵葉書は国家の記念行事だけでなく、美人や東京の新しい風景・各地の名勝、さらには災害までも伝えるニュース媒体としても使われたのです。東京の絵葉書の発売元は、江戸時代に錦絵などを売っていた絵草紙屋からの転業者が多かったといわれています。写真絵葉書は、江戸の土産物として喜ばれた錦絵に代わって、東京土産となったのです。

錦絵で描かれていた堀切の菖蒲園も、写真絵葉書となります。手彩色で色づけされたものもあり、各菖蒲園の名入り絵葉書は来園記念のお土産品として売られ、花菖蒲の美しさを伝える宣伝媒体となりました。英文入りのものもあり、外国人が花菖

蒲見物に訪れていたことを窺わせませす(図10)。

おわりに

近年、画像資料が地域の歴史を物語るものとして、注目されています。堀切の菖蒲園に関する画像資料を収集し、古文書や記録と照合して丁寧に読み解いていくことによって、地域の歴史をより深く、豊かに物語る事ができるのです。

現在、画像資料の範囲は、手描きの絵図、錦絵・石版画・絵葉書などの出版物から、公的機関や個人が撮った写真、映画やビデオなどの動画資料にまで広がっています。葛飾区郷土と天文の博物館では、これらも様々な画像資料を収集・保存し、研究した成果を、展示や出版物の形で広く公開していきたいと考えています。

参考文献

- ・金丸弘美編『宮武外骨絵葉書コレクション』(無明堂出版、一九九七)
- ・橋本直子「江戸文化と花菖蒲『世界のアイリス』(誠文堂新光社、二〇〇五)
- ・『かつしかブックレット14 花菖蒲III』葛飾区郷土と天文の博物館、二〇〇七
- ・『広重 初代』五代広重のガイドブック』(太田記念美術館、二〇〇七)

※図は注記のあるもの以外は、葛飾区郷土と天文の博物館の所蔵。



(図9、美人十二ヶ月 堀切の菖蒲 五月
【東京都江戸東京博物館蔵】)